国際理解教育の指針と展開
～学校現場における総合学習プログラムの一環への位置付けを考える～

窪田　晃子

要　旨

近年、日本国内だけでなく全世界的に“国際化”や“global-vision”などという言葉が叫ばれるようになってきた。それに伴い、その国際化に対応すべく人材を育成するという目的の下、「異文化理解教育」や「国際理解教育」という教育項目が設けられ、生涯学習の一環としてカルチャーセンターや学校など様々な教育現場で少しずつ取り入れられるようになってきた。しかし、近年急激に勢いを増してきた“国際化”の波に対応すべく、教育内容について様々な研究がなされているようではあるが、まだまだその方法や方向性は様々で教育媒体や教授する側もその指針や方向性について模索している段階であり、統一された教授法、教授内容がないのが現実である。この現実に押し寄せている国際化の波に対応するためにも、いくつかの指針とその展開方法などの、国際理解教育の歩んで行く方向性を見出し、展開させて行かなくてはならない。この論文がその糸口になればと思う。

【キーワード】国際化（globalization）／ボーダレス化，異文化理解教育／国際理解教育，新学習指導要領／教育の国際化／総合学習，課外授業

１．　教育の国際化

近年、世界の経済・情報・交通などの「物の交流」が盛んになり、**ボーダレス化**が進む一方で「人の交流」に際して、環境や人権などの人類共通の諸課題が大きくクローズアップされている。様々な地域に住み、異なった文化・言語の人々が行き交ういわゆる“国際化”（社会）の到来である。我々島国に住む日本人も、今までは他人事であった民族間の争いや、異文化・言語の紛争など、異なった文化・習慣・言語間の争い事がまさに身近な問題となり得る状況にある。また、それらの異文化的背景を持った様々な人々と共生していくための資質として、日本人としの日本文化・日本語の認識や同じ地球という地域に住む“地球人”として多くの問題について真剣に考えていく必要性と国際化社会に適応したコミュニケーション能力を持つことが強く求められている。そこで、それらの問題に対処するべく解決策として生み出され、注目されているのが**“国際理解教育”**である。類似した教育活動として**“異文化理解教育”**が挙げられるが、これも国際理解教育という大きな枠組みの一つの基盤として、つまり国際理解教育の一環として考えて行きたいと思っている。

さて話題を元に戻すが、「解決策として」国際理解教育が生み出され、注目されていると先述したが、あくまで「解決策の一つとして」と言ったほうがよいかもしれない。というのは、社会の国際交流は今に始まったわけではなく何千年もの昔から行なわれていることであるが、極めて著しく交通・物流などの面で国際化が進んできたのはここ５０年程の話である。従って、社会の国際化に対応すべく生み出された“国際理解教育”なるものは、学問分野としてはまだハイハイもしていない赤ん坊と同じなのだ。ということは、この先どんな目的を持ってどのような方向性の下に発展・進歩していくのかが決まっていない状態にあるのである。全く研究・開発がなされていないわけではないが、“国際理解教育”という分野で統一された教授方法や教授内容、指針が設けられておらず、様々な教育現場でそれぞれの“国際理解教育”がそれぞれの方向に一人歩きしてしまっている状態にあるのだ。しかしながら国際化の波は押し寄せ、時代も教育も流動的に動いている今、立ち止って考えている時間はない。模索しながらその方向性を見出し、目標を掲げ指針を打ちたてていかなければならない。そこで、新学習指導要領の下に**教育の国際化**スローガンに新しい学習のスタイルを展開し始めた学校教育現場において、国際理解教育はどのような位置付けでどのように組み込んでいったらよいのかを検討し、これからの教育現場での新しい糸口になればと検討してみることにした。

２．　新しい教育

前項でも触れたが、平成１１年（1999）文部省より新学習指導要領として新しく改訂された学習指導の指針が打ち出された。教育現場において“国際理解”という言葉が注目され始めたのもこの

頃である。「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」などに代表されるように、主に外国語科（英語科）を中心として“国際理解”に重きが置かれるようになった。これは外国語学ぶ上では言語構造のみならず、その外国語の持つ文化的背景を学んでこそより生身にちかい生きた言語（外国語）を習得することが出来るという目標のもとに立てられた指針であるが、実は外国語科だけにとどまらず、大きな広がりを持ったものなのである。

最近“総合学習”と言う言葉を耳にしたことはないだろうか。総合学習とは各教科ごとを独立した個別なものとせず、それぞれが相互に作用しあい繋がりを持っていく学習の考え方である。これも『新学習指導要領』に掲げられているスローガンのひとつであるが、それぞれの科目が独立独歩で授業を進めていくよりも、互いに踏み込んで授業が出来るような部分に付いては積極的に相互の授業を取り入れながら学習・教授した方が学ぶ側にとっても学習に幅ができ、より学際的な学習が可能になり、より効率的である。と、言葉を羅列しても理解しにくいと思うので簡単な例を挙げて見たいと思う。

例えば、国語科の授業で「チベットに住む少数民族のノンフィクション」を取上げるとする。国語科の授業としてその内容について読みこんでいくことはもちろんであるが、内容理解をより深める意味も含めて、チベットという環境がどのような（場所）であるか、または実際にどのような暮らしをしている人たちが住んでいるのかなど、地理・歴史などの社会科的な面からも学習するというような方法である。つまり、国語科の教科書に取り上げられたことをきっかけに、（チベットまたはチベットに住む人々を知るためのきっかけを得たとうことを契機に）国語科という一方向からだけではなく、社会科という別の方向からも視点を設けて学習することにより、ひとつのものごとを多くの視点から見、理解を深め、より多彩に学際的に広がりを持った学習形態をとることができるということだ。“一粒で二度おいしい”または“一石二鳥”な学習方法とも言えるかもしれない。また、国語科が苦手な生徒でも、社会科といった別の視点から見ることで、今までとは違ったとらえ方ができるようになったり、幅広く興味を持てる可能性もある。

このように教科での学習内容をひとつのきっかけとして、その教科のみならず様々な教科と関連付け、多彩な視点から検討することによって学習者の興味の幅を広げたり、理解を深めたりする学際的な教授・学習方法が“総合学習なのである。”これを新しい教育のテーマに挙げ、積極的に学校教育の場に取り入れていこうという提案がなされた。しかしながら、現実的には小学校よりも中学校、中学校よりも高校と学年が上がるにつれ“受験”というものを意識しなければならなくなり、学校は受験のための勉強としての授業をしなくてはならない状況に追いこまれてしまうケースが多い。このため新しい教育のテーマに掲げられた理想の学習方法はなかなか現場に取り入れられないままでいるのが現状である。

昨年私は、教育実習または学部卒業論文の調査依頼のため、母校である公立高校を何度か訪れたが、そこでも総合学習のスタイルを取り入れたいと思う教員はいてもカリキュラム上取り込みにくく、通常の授業構成のなかでは実現できないというのが現状であった。その打開策として**課外授業**や **HR**（ホームルーム）の時間を利用して**学科授業以外の授業**を行なったりしている。教育の大きな理想と現実が交差した一面ではあるが、総合学習をカリキュラムに組み込むことが困難な現状では、課外授業や HR を利用して国際理解教育などの予備教育を少しずつ取り入れて行く努力が必要なのではないだろうかと思う。そこで、課外授業でどこまで国際理解教育によって国際理解の芽を浸透させていくことができるのだろうか。また学校ではどういったシラバスが必要になり、学習者である生徒たちはどのようなことに興味を持っているのか（ニーズ）なども検討しながらモデルとなる国際理解教育のカリキュラムやシラバスなどについて考えいこうと思う。

3． 国際理解教育とは

ここからは『異文化理解のストラテジー』（大修館．1995）を参考に国際理解教育について考えてみようと思う。

①新学習指導要領をベースに…

社会及び世界経済のボーダレス化に伴って、国際理解および国際理解教育など様々なバックグラウンドを持った人々と共生していくためのコミュニケーション能力やその育成が必要とされ注目されてきていることについては、先述したため省略させて頂いたが新学習指導要領の改訂（主にここでは外国語科のものを中心に取上げる）については、少し触れておきたい。改訂の目玉は「コミ

ュニケーション能力と積極的な態度の育成」にあることは指導要領本文に指摘されている文化的側面についても注目すべきである。
改訂以前は「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養うとともに、言語に対する関心を深め、外国の人々の生活やものの見方などについて基礎的な理解を得させる」とあったが、改訂後は「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」となった。従来の「言語に対する関心」に「文化」が加えられ、さらには「基礎的な理解を得させる」が「国際理解の基礎を培う」と主体性を持たせた形に改められている。一方的に相手を理解するのではなく、相互交渉による国際理解の基礎となるような教育（言語教育）が求められている。

ことばは、相手と会話を交わしてはじめて意味をなすものである。言語構造を理解しているだけでは真に理解することは難しい。同じ言語を使っていても地域や年齢など様々なバックグラウンドによって理解の仕方、受けとめられ方が違う場合もある。実際のコミュニケーションには文化的な知識（同一文化内であっても）も大変重要な位置を占めているのである。それに賛同するものとして「ユネスコの国際教育勧告」や我が国の「教育白書」などがあるが、ここでは参考までに紹介だけにとどめておく。

②欧米での動き

多民族・多文化社会である欧米諸国では1960年代頃から、「異なる価値観を持った人々が共存するためにはどしたらよか」、「ますます狭くなる地球をどうしたらよいか」という問題が教育の場で真剣に扱われてきた。これには戦争の傷跡としての植民地問題や、交通の便がよくなったことからの移住などが大きく影響していると思われるが、言語や文化の異なる人たちと同じ社会で共存することが欧米（とくに先進諸国）では大問題となり、教育もそれへの対応に迫られた。こうした動きの代表的な著書に *"World Studies 8-13: A teacher's handbook"* があるが、この本はイギリスの小学校教諭が大学などの研究者と協力して、相互依存を強めつつある地球社会やそこで起きている変化について何をどのように教えたらよいのかをシラバスとして提案したものである。扱っているテーマは多岐にわたり、問題解決には地球規模の協力が必要で、そのための知識・姿勢・技能を養成する教育を**国際教育**呼び、ひとつの道しるべにしている。ここではこの『ワールドスタディーズ』の各項目について細かく取上げることはしないが、これも参考にして国際理解教育の指針について考えて行きたいと思う。

③日本国内での実践

では、今まで日本の学校教育ではどのような国際理解教育が実践されてきたのだろうか。中学校と高校での実践例をひとつづつあげると、横浜国立大学付属鎌倉中学校では「国際社会の中で必要とされる多様な価値観や実践的態度の育成」と規定し、***「目標内容の構造図」**を作成しています（1991）。これは人間の基本的な価値の上にたって、異なる文化と日本文化をともに理解し、相互理解と協力に努める実戦的な態度の育成を目指すという国際教育の本来的な姿勢を示している。

また、高等学校の例は、HR活動での事例集として大阪府科学教育センターが作成した物（1991）がある。この実践のユニークな点は、日本人は自分の価値観で異文化を判断しがちであるという反省から、衣・食・住・宗教生活などの身の回りの生活文化、特に、わが国と深い関係にあるアジア文化を取り上げ、単に知識レベルの理解に止まらないように、その国に人の講演を聞いて生徒自身に課題を見つけさせパネル・ディスカッションなどで問題の解決策を模索させている点にある。このような実践を見る限るでは、日本における国際理解教育もまた自国の文化と異文化理解のバランスを大切にしていることが分かる。

このような具体的な事例なども参考にしながらこれからの国際理解教育にはどのような柱が必要でどのように展開していけばよいのかについて考えていきたいと思う。

4．国際理解教育の導入と展開

さて、今までは国際理解教育の必要性と、求められる資質、または実際に行なわれていた国際理解に関する指導方法を具体的な事例を用いながら見てきた。タイトルにもあるように、『国際理解教育の指針と展開』ということで、新しい教育という観点から学校教育の在り方を見なおし、新教育の大きな柱でもある国際理解教育をカリキュラムの中にどう組み込んで行くのかを現実的に考えなくてはならない。それには、各教科毎にある、文部省が定めた学習指導要領による卒業までの必要単位数の問題も外すことはできないし、学校行事などの特別活動の問題も絡んでくる。これら

の学校が抱える問題も検討した上で、カリキュラムに組み込み、かつ学習者である生徒にとってまた教える側である教師にとっても有意義な物にしなくてはならない。では、どのように整理していけばよいだろうか。

まず、カリキュラム及び授業科目としてどの時間に持って行くかと言うことであるが、本来ならば科目の授業を行なっていく上で、文化と文化がなんらかの関わりを持つ場面の要所で、topic としてとりあげながら、国際理解を深めていけばよいのだろうが、“受験”という目の前に立ちはだかっている大問題を無視することはできず、科目の授業時間の中で国際理解教育を推し進めていくことは困難である。ではどこに組み込んで行けばよいのだろうか。私が前例で示したようにいわゆる課外活動といわれた科目授業のカリキュラム以外の部分でもしくは、HR として設けられている時間を活用することはどうであろうか。

この場合も多くは受験対策として予めカリキュラムの中に組み込まれた“課外授業”などが準備されている場合が多いが、そのうちの時間を少しづつ削って 1 時間でも 2 時間でも国際理解ということについて考える時間が持てればよいと思う。では、内容はどうであろうか。1 時間 2 時間とある程度の塊の時間が持てるのであれば用意周到な授業準備が必要となってくる。せっかくの受験勉強の時間を割いて行なうのだから、生徒が興味を持つような内容でなくてはならない。従ってニーズ調査が必要になってくる。生徒が要求する学習内容になるべく近づけるように教える側も配慮する必要性があるからだ。わたしが学部の***卒業論文**において実施した『高校生の国際理解教育に関する意識調査』では、主に 4 つのセクションにわけ、生徒の海外及び外国に対する興味・感心や、異文化接触経験など環境について、国際理解教育の必要性と外国語に対する意識について、またケススタディイとして「宗教」を通しての内面からの国際理解について高校生の興味・意識について調べた。

それによると興味の対象は国別に言うとアメリカを中心とした欧米諸国が根強い人気で、文化面にも欧米諸国の文化について興味をもっている生徒が多かった。またその一方で、「情報収集の場としては TV や新聞などのマスメディアが挙げられ、ある偏った（**欧米諸国文化至上主義**）情報しか入ってこないため、他の文化・国々について知らないことが多く、比較できない」と現状を冷静に客観視するケースも何件か見られた。このことから、欧米諸国・文化に興味を持つ生徒の背景にはそのようなの情報収集の方法が大きな影響を及ぼしていることを視野にいれながら、欧米諸国・文化至上主義的な考え方にとらわれず、あくまで幅広くできるだけ公正な視点から授業の topic を検討する必要性がある。

さらに、異文化との接触経験についてであるが、接触経験自体は少ないものの「興味がある」または「関わりを持ちたい」と積極的な回答をした生徒が全体の 80%にものぼっており、その必要性を示唆している。ここでの課題は異文化接触に対する知識と実際に授業内で異文化接触が出来るような環境を作れるかどうかにありそうだ。コミュニケーションとことばに関する調査や、ケーススタディーから異文化接触を考えるセクションの中でも、生徒たち自身が「机上の学習よりも実体験の学習」を望んでいることがうかがえる。以上を考慮すると、まず第一に、我々が無意識のうちにもっている「欧米諸国・文化・言語至上主義」からの奪回とともに「外国語＝英語」という方程式からの離脱が大きな課題となる。また、どのような topic を選択するかということであるが、これもできればひとつに絞らず、いくつかのテーマを用意して生徒側に選ばせる方式をとることで、国際理解の視点に幅を持たせることができるのではないかと思う。課外授業またはホームルーム（以下 HR）での授業展開を視野に入れた学習では、学校での各クラスまたは学年が同じ時間割の中で授業を選択することが比較的容易になる。何人かの教員がいくつかのテーマのもとそれぞれの授業を開講し、生徒がそれらを選択するという自主選択方式を取ることでその学習をより印象強くする効果もあるのではないかと思う。

5． 総合学習としての位置付け

前項で総合学習についての簡単な説明を記したが、総合学習として国際理解教育を授業カリキュラムの中に取り入れることは大変困難であることも指摘した。しかしながら、私自身、教育に独立独歩の教科などはないと考えている。それぞれが、独立した教科目標と決められた時間数の中で、それぞの style をとっていることは確かであるが、必ずそれらは自然的にどこかしらでつながっていくものである。単純なところでは、国語科で学ぶべき、文字・漢字ができないと他の教科の教科書を読むこともできない。文章が何を問うているのかが分からなければ数学や理科の問題も解くことができないなどであるが、これは幾分偏見かもしれない。しかしながら、このそれぞれの教科が

“総合学習”という肩書きを持つ前から影響しあっていたことは事実であり、お互いがいい関連性を持っている。これを上手く利用しながら、敢えて新しい形にこだわらず、しかし貪欲に追求しながら学習カリキュラムを組みコースデザインして行くことが重要であると考えている。

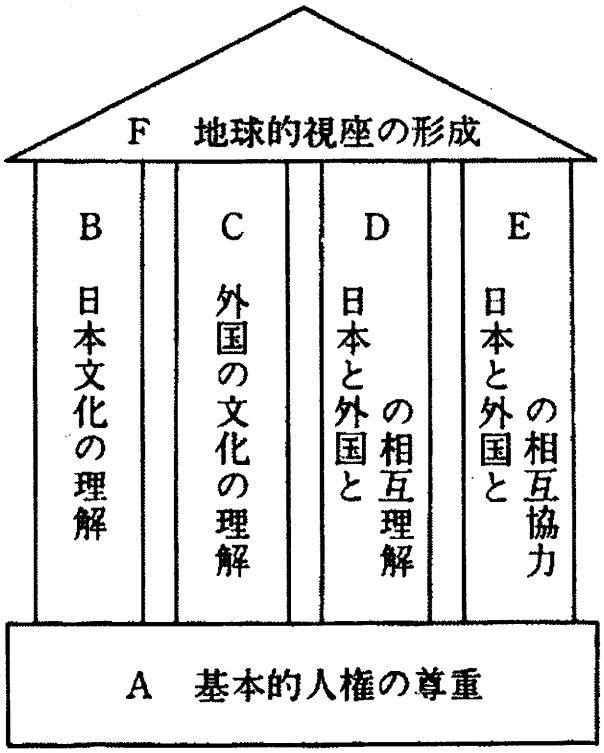
6．　これからの研究について

本論文のみならず世界中で国際理解教育を推進している現在、なによりも議論しあうだけでなく様々に実践し、経験の中で模索しながらその方向性を探る必要性がある。教育とは対“生き物”の学問であり、そのものも流動的であり、そこに留まっていることはない。また、教育に「これが一番」と言う方法はない。何通りものテーマがあって、ニーズがあって教授・学習法方があって当然である。今は、その出来るだけ多くの事例に遭遇し、対処方法を探し実践でおこなっていくことが先決である。

これからの研究の中では、以上のことを含め、世界をフィールドとした（国際人として）日本人としての、日本文化・日本語についてどのような知識を持っているのかなど、興味・関心などをもとに、“国際理解教育”を基盤として、学校教育という立場からどのように影響していけるかを実質データを取りながら、自分なりに考え、新しい教育体制を意識して具体的な指針についてまとめていきたい。また、学習者の“生の声”を聞くことによって、今現在の教育体制についてどのように感じ、消化しているのか、また、どんなことに興味・関心を抱きどんな学習スタイルで学習したいと思っているのかなど、教育または学習というものの全体像についても把握していきたいと考えている。そして、それがこれからの学校教育またはその他様々な場面での国際理解につながる糸口になればと思う。

参考資料

＊「目標内容の構造図」



＊卒業論文

昭和女子大学文学部日本文学科日本語教育学専攻　卒業論文　．窪田晃子（2000）

『国際理解教育』―高校生の実態調査をもとに考える―

＊本論文中の実地調査もこの論文中で扱われているものと同じである。なお調査内容に　ついては参考（調査）資料として添付してある。

国際理解教育に関するアンケート

昭和女子大学　文学部　　窪田　晃子

これは高校生である皆さんの海外（外国）に対する興味・関心度を知るためのアンケートです。アンケートの後半では「国際理解教育」や「日本語教育」など聞きなれない言葉が出てくる箇所もありますが、質問をよく読んで、ありのままに素直に答えてください。

学校活動が忙しい中、貴重な時間を割いていただいて大変申し訳ありませんがご協力をお願い致します。

＜注意＞

①特に指定のない部分については複数回答可です。

②アンケートの中に外国または外国人という表現が度々出てきますが、様々な環境の生徒さんがいらっしゃると思うので（たとえば日本人ではない方もいらっしゃると思うので）ここではどのようにとらえていただいても構いません。

③また、これは私個人の「卒業論文」以外での使用、公表は一切行ないませんのでご安心下さい。

＜はじめに＞

アンケートを行う前にあなたのことについて簡単に教えてください。

・性別　【 女 ・ 男 】

・海外在住経験　【 ある ・ ない 】

↓（具体的に「どこに」「どのくらい」）

Ⅰ．以下は、あなたの持つ海外（外国）に関する興味・関心についての質問です。

1．“外国”という言葉から思い浮かべる国はどこですか？（思い浮かぶ順に３つ）
またその国にもつイメージがあれば書いてください。

＜国の名前＞	＜イメージ＞
①	①
②	②
③	③

2．“外国人”と聞いて思い浮かぶのはどこの国の人ですか？（思い浮かぶ順に３つ）
またその外国人にもつイメージがあれば書いてください。

＜国の名前＞	＜イメージ＞
①	①
②	②
③	③

3．“外国人”と言う言葉から思いつく言葉を書いてください。
（上の質問の回答と重複しても構いません、自由に書いてください）

4．海外（外国）のことについて興味・関心はありますか？
【 ある ・ ない 】

5．今年一年間（西暦2000年）の海外のニュースで特に印象の強かったことは何ですか？
（複数回答可）

6．それらのニュースは主に何を通して知りましたか？
【 TV ・ ラジオ ・ 新聞 ・ 雑誌 ・ 人から ・ その他 】

＊「その他」を選んだ人は具体的に…

7．海外（外国）のこと（ニュースなど）についてもっと知りたいと思いますか？
【 思う ・ 思わない 】

＊「思う」と答えた人…具体的にどんなことについて知りたいですか？
（自由に書いてください）

Ⅱ、次にあなたの持つ海外との接触経験（環境）について聞かせてください。

8．外国人と積極的に関わりを持ちたい（コミュニケーションしたい）と思いますか？

【①とても思う　②できれば持ちたいと思う　③あまり思わない　④全く思わない】

＊その理由はなぜですか？（特にない人は何も書かなくて結構です）

9．今まで海外へ行ったことがありますか？　【　はい　・　いいえ　】

＊「はい」と答えた人…

・具体的に、どこへ・どのような目的で・どのくらいの期間行きましたか？

（印象の強かった順に３つ書いてください。）

＜国名＞	＜目的＞	＜期間＞
①	①	①
②	②	②
③	③	③

・これから行ってみたいと思う国はありますか？また、それはどうしてですか？

＜国の名前＞

＜理由＞

＊「いいえ」と答えた人…

・どうして今まで海外に行かなかったのかについて教えて下さい。

【①機会がなかったから　②興味がないから　③その他（できれば具体的に）】

↓

・外国（海外）へ行ってみたいと思いますか？

【　①とても思う　②少しは思う　③思わない】

＊①または②と答えたひと…

行ってみたいと思う国はどこですか？またその理由は？（複数回答可）

＜国の名前＞

＜理由＞

＊③と答えた人…「行ってみたい」と思わない理由があれば書いてください。

10．あなたは外国人と接したことがありますか？

【　①まったくない　②１～２人ある　③３～４人ある　④５人以上ある　】

＊①と答えた人…

・今までに一度も外国人と接したことはありませんか？【　はい　・　いいえ　】

・もしこれから接する機会が会ったら積極的にコミュニケーションを図ろうと思いますか？【　はい　・　いいえ　】

＊①以外と答えた人…

・その外国人とはどのようなきっかけで知り合いになったのか教えてください。

（例：学校のクラスメイト・友達の紹介・両親の友人　などできるだけ具体的に）

・その人はどこの国の人ですか？【　　】

・その外国人とは、どんな言葉を使ってコミュニケーションしていますか？

（複数回答可です。例えば日本語と英語の場合は①と②と解答してください。

また④を選んだ人は、もしよければ具体的にどんな言葉なのか書いてください）

【　①英語　②日本語　③ジェスチャー　④その他の外国語　】

↓（具体的に）

・その人とコミュニケーションを図る上で何か不便を感じたことがありますか？

【　①とてもある　②少しある　③特にない　】

・上の質問で、①または②と答えた人は、どのようなことについてですか？

自由に書いて下さい。

11．あなたのクラスに外国から転校生が来ました。あなたならどうしますか？

①積極的に話しかける　②話しかけたいと思うが躊躇してしまう

③必要なことがあれば話す　④なんとも思わない　⑤あまり関わりたくない

⑥その他（具体的に…　　）

＊その理由は何ですか？

Ⅲ. 次は“国際理解教育”という文化・習慣の違いから起きる摩擦をなるべく防ぐための学問分野についての質問です。「お互いの（文化などの）違いを認め合い、譲りあおう」という“柔軟なコミュニケーション能力”を育て、伸ばす教育を行なおうというものです。

13. 今までに「国際理解教育」と言う言葉を聞いたことがありますか？
【 ①ある ②ない 】

14. 学校でそのような授業は今必要だと思いますか？
【 ①思う ②あまり思わない ③必要ない 】

15. もしそのような授業が開講されていたら、受講しようと思いますか？
【 ①積極的にする ②「してみようかなぁ」くらいには思う ③思わない 】

16. 授業が行われるとしたらどんなことをテーマに学習したいですか？（自由記述）
例えば…「ある国の文化について調べたりする（文化を知る）」
「異なる文化の間で起こっている問題を取上げて考える（実際に考える）」

17. 今現在、あなたはどんな外国語を学習していますか？（複数回答可）
【 ①英語 ・ ②その他の外国語（具体的に… ） 】

18. どうしてその外国語を勉強しているのですか（理由）？（自由に書いてください）

19. では、これから学習するとすればどんな言語（外国語）が学びたいですか？

20. その理由があれば簡単に書いてください。

Ⅳ. 最後に次の文章を読んで問いを考えて見て下さい。

『エジプトのクリスマス』

春夫くん大学に行く途中、友人のエジプト人留学生イスマル君に会いました。
彼はいつものようにニコニコしていて元気そうです。

春夫 「やあ、元気だった？来週さ、12月24日とか25日とかヒマある？」
イスマル「もう授業もないから、時間はあるけど。」
春夫 「ほら、フィリピンのエリャさんているだろ？彼女が一緒に教会のミサに行かないかって。とっても雰囲気がいいんだってさ。一緒に行かない？」
イスマル「でも僕はイスラム教徒だから。」
春夫 「えっ、僕だってクリスチャンじゃないよ…」
この後イスマル君は「僕もう行かなきゃならないから。」といって去ってしまいました。

【問１】どうしてイスマル君は行ってしまったのでしょうか？
最も近いと思われる解釈を選んで○をつけてください。

① イスマル君は、クリスチャンでもないのにミサに行こうとする春夫くんが、嫌になったから。
② エリャさんは春夫くんと行きたいのに邪魔をしては悪いと思ったから。
③ イスマル君は、自分がイスラム教徒であると知っても「行こう」と誘う春夫くんに自分の宗教（イスラム教）が軽んじられているような気がしたから。
④ イスマル君は、女性と一緒に出かけるのは（宗教的に）不道徳だと感じたから。

【問２】この文章から思うこと・感じることを自由に書いてください。

以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。

参考文献

＊なおこの文献リストは５０音順である

(1) 板橋区立　志村第四小学校研究紀要（1993）『児童の実態調査』
(2) 板橋区立　志村第四小学校研究紀要（1994）『児童の実態調査』
(3) 板橋区立　志村第四小学校研究紀要（1995）『児童の実態調査』
(4) 甲府市立　新田小学校研究紀要（1990）『帰国子女の実態調査』
(5) 国語教育研究所（1988）『国語教育研究大辞典』明治図書
(6) 佐野正之ほか（1995）『異文化理解のストラテジー』大修館書店
(7) 総務庁行政監察局編（1997）『教育の国際化を目指して』大蔵省印刷局
(8) 茅野友子（2000）『国際化時代の日本語』大学教育出版
(9) 新里眞男（1999）「生徒と教師が創る 21 世紀の英語教育―新学習指導要領のねらいと授業実践への期待―」『英語展望，1999 年夏月号』No,106
(10) 東根小学校日本語学級発行（1998）『目黒区東根小学校紀要』
(11) 文化庁文化部国語課（1994）『異文化理解のための日本語教育 Q&A』大蔵省印刷局
(12) 文化庁文化部国語課（2000）『国語に関する世論調査―言葉遣い・国際化時代の日本語―』〔平成１２年１月調査〕大蔵省印刷局
(13) 古川嘉子（2000）「海外での日本語教育と派遣」『月刊　日本語　2000 年 2 月号』
(14) 本名信行ほか（1994）『異文化理解とコミュニケーション－１』三修社
(15) 牧昌見ほか（1997）『子どもをめぐる問題にどう応えるか』―国際理解教育　問題解決シリーズＩ―　東洋館出版社
(16) 三国純子・小山真理（2000）「海外の大学生を対象とした短期集中日本文化学習の試み」『日本語教育 105 号／2000．4』日本語教育学会
(17) 港区立鞆絵小学校研究紀要（1990）『児童の国際理解に関する実態調査』
(18) 目黒区立東山小学校紀要（1991）『児童の国際理解に関する意識調査』
(19) 目黒区立守屋教育会館教育研究所（1992）『国際理解教育に関する資料』
(20) 文部省（1999）『高等学校学習指導要領解説・外国語編／英語編』
(21) 文部省（1999）『高等学校学習指導要領解説・国語編』
(22) 文部省（1999）『高等学校学習指導要領解説・総則編』
(23) 文部省（1999）『小学校学習指導要領解説・国語編』
(24) 文部省（1999）『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）―解説・国語編―』
(25) 湯浅俊彦（2001）「責任ある日本語を目指して」『月刊　言語　2001 年１月号』vol,30
(26) 渡辺文夫（1995）『異文化接触の心理学…その現状と理論…』川島書店
(27) Ｈ・Ｇ・ウィドウソン著、東後勝明／西出公之訳（1991）『コミュニケーションのための言語教育』”Teaching Language as Communication”研究社出版